

メッセージ「人は見かけか、内面か」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 3章13-17節

「人は見かけか、内面か」という言葉は、しばしば耳にする言葉ではないかと思えます。人間の価値は外見だけでは決まる筈がない、と思う一方では、「人は見た目が9割」というような本が、いつでも売れていますし、お店も施設も、また衣服も古くて汚らしいよりは、新しくてきれいな方がよいというもの、私たちの自然な感情なのかと思えます。今回の「招きの詞」は、そんな私たち人間の想いに対して、神様はどのように人を見ているか、を述べた言葉として有名です。「人は目に映るところを見るが、神は心を見る」(サムエル上16:7)……。これは預言者サムエルが、古代イスラエル国の新しい王様となる人を迎えるため、神様に命じられてベツレヘムに行き、そこでエッサイという人の息子たちの中から神様の選ばれた一人を見つけ出すという場面で語られた言葉です。

エッサイには8人の息子たちがいて、サムエルはその長男から順番に会って行きました。そのたびに彼は「この人かもしれない」と思うわけですが、神様はその人たちを選ばれませんでした。「主はサムエルに言った。『容姿や背丈に捕らわれてはならない。私は彼を<sup>しりぞ</sup>退ける。私は人を見るようには見ないからだ。人は目に映るところを見るが、私は心を見る』」というわけでした。そしてエッサイが連れて来た7人の息子たちが全員選ばれなかった後、もうこれで全員ですかとサムエルに問われた後、「末の子がまだ残っていますが、羊の群れの番をしています」(16:11)と言って、外で羊の世話をしていた、王様候補になんてなり得ないと思われていた一番小さなダビデが呼ばれて、サムエルの前に連れて来られ、そして彼が選ばれたというお話でした。ダビデは、古代イスラエル王国の2代目の王で、エルサレムの都を造り、統一王国を確立した有名な王様です。更にその息子ソロモンの時代には、経済的な繁栄もあり、エルサレムに神殿が建造され、親子2代にわたって、イスラエルの黄金時代と考えられていました。そのためにイエス様の時代にあっても、「あのダビデのような救い主が、再び来てくれる」という期待が、人々の中に根強くありました。しかし、改めてヘブライ語聖書に記されている彼らの物語を読む時、彼らが神様から評価され、よしとされているのは、強大な王国を作り経済的に繁栄したからでも、立派な神殿を建てたからでもなかったということが分かります。彼らもまた一

介の人間として、王という地位に就いた後には、その権力におぼれて罪を犯していきました。ヘブライ語聖書が伝えているダビデの物語は、彼が王になる前、人の目から見るとまだ小さな、役に立たない、羊飼いの少年と見なされていたにもかかわらず、選ばれたということ（サムエル上 16 章）であり、また力がなく貧弱であると思われたにもかかわらず、イスラエル軍の兵士たちが誰も敵<sup>かな</sup>わなかったペリシテ軍の大男に勝利したということ（サムエル上 17 章）でした。神様の力は小さなものを選び、小さなものにこそ働く……、ダビデ物語はそのことを現わしていたと考えることができます。

さて、そんなダビデの時代から約 1000 年が経った頃、イエス様が誕生されました。そして今回の聖書のお話は、大人になったイエス様が、洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたというお話でした。『ルカ福音書』では洗礼者ヨハネとイエス様は、親戚とされていますが、それは二人の関係をより親密なものとして描こうとした表現だったと考えられています。むしろ実際には、当時、ユダヤ地方の荒れ野に洗礼者ヨハネと呼ばれる預言者が現われ、粗末な衣服を身につけ、質素な食べ物を食べ、町にいた宗教指導者たちとは異なった教え、差し迫った神の怒り、裁きを述べ伝え、人々に悔い改めの洗礼を授け、生き方の変革を促していた、ということでした。そして、そこに各地から大勢の人々が集まって来ていました。その中の一人にイエス様もいました。

ガリラヤ地方のナザレ村から出て来ていたイエス様もまた、様々な差別と抑圧、貧困の中、新しい生き方、神様の示される生き方を模索していたのでしょう。彼は洗礼者ヨハネから洗礼を受け、その許にしばらく滞在して、教えを聞くうちに、これは自分の考えとは違う。天の神様の御心、本当の福音ではない、と自分とヨハネとの齟齬<sup>そご</sup>に気が付き始めました。そして、やがて彼とは袂<sup>たもと</sup>を分かち、ご自分で教えを宣べ伝え始められました。聖書ではこのイエス様の受洗が、宣教開始の前に位置付けられ、受洗した時に、すぐさま天が開け、神の霊が鳩のように降って、宣教を開始するための特別な力、パワーが授けられたかのように記されていますが、実際にはヨハネの許<sup>もと</sup>で何日間も時間をかけて生活する間に、インスピレーション（ひらめき）としてヨハネとは異なった独自の神の国の福音理解が生じた、それを「聖霊が降った」と表現したのではないかと思います。

私たちは「洗礼」という言葉を聞くと、いかにも罪を「洗い清める」、いわゆる「禊<sup>みそぎ</sup>」のように思うかもしれませんが、しかし、「バプテスマ」という

言葉の元々の意味は、水の中に「沈める」「<sup>ひた</sup>浸す」です。ですからバプテスマ派の教会では「洗う礼・洗礼」ではなく「浸す礼・浸礼」と書かれています。イエス様が実際に洗礼者ヨハネから、洗礼を受けたのはどこなのか、というのは厳密には分かりませんが、今から6年前の2015年には、ヨルダンにあるイエス・キリストの洗礼の地として伝えられている「ヨルダン川対岸のベタニア」(アル・マグタス)(ヨハネ1:28)の遺跡が、世界文化遺産として登録されました。そこは世界で一番海拔が低い湖である死海の北9km、ヨルダン川の東側の岸に位置するそうです。イエス様がおられたナザレのあるガリラヤ地方からすると、ヨルダン川に沿って下へ下へと低く降って行ったということが分かります。

日本で水や川というと、無色透明で澄んでいて清らかなイメージがありますが、ヨルダン川の水は濁っているそうです。そのためにそこで行われたバプテスマとは、日本で考えるような清らかな水で罪やケガレを流し去って洗い清める「<sup>みそぎ</sup>禊」ではなかった。釜ヶ崎の本田哲郎神父によるとむしろ「泥水をくぐる」ことであり、それは水の中で一度これまでの自分に死んで、この世界をより低い所から、より汚い泥水の中から見つめ直すこと、それまでの自分の価値観を捨てて、新しい神様の価値観を身に帯びて生き直すことの象徴行為だったと考えられるそうです。ですから、洗礼はその当初から、天国に行くためのパスポートではありませんでした。イエス様自身、洗礼者ヨハネから洗礼を受けたものの、ヨハネたちと分かれた後、ご自身は弟子たちに洗礼は授けられませんでした。『ヨハネ福音書』によると、「イエスがヨハネよりも多くの弟子を作り、<sup>バプテスマ</sup>洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った」そうですが、実は「<sup>バプテスマ</sup>洗礼を授けていたのは、イエスご自身ではなく、弟子たちであった」という注意書きまでがきちんと記されています(4:1-2)。

キリスト教を歴史的に見ると、「洗礼を受けていないと天国には行けない」と言われて来た時代も長くありました。そのためにお産の際に、新生児の死亡率が高かった時代には、教会から司祭が来るのを待ってられないので、お産婆さんがその場で緊急洗礼を行うことが多々あったそうです。しかし、全ての命の創り主である神様の目から見た時に、緊急洗礼が間に合った赤ちゃんと、間に合わなかった赤ちゃんの間に、何か違いがあるのでしょうか。もちろん、あるはずがありません。そしてそれは大人であっても同じではないでしょうか。私たちはともすると、洗礼を受けているか、受けていないか。礼拝に出席しているか、出席していないか。奉仕活動をし

ているか、していないか。献金を献げているか、献げしていないか……など、様々なことで目の前の人を区別して、裁いてしまいます。しかし、それは人を外見だけで判断してしまっていることと同じではないでしょうか。

新型コロナの感染拡大を受けて、一昨日 8 日から、東京・埼玉・千葉・神奈川の 1 都 3 県には、新型コロナウイルス対策の特別措置法に基づく緊急事態宣言が、来月 2 月 7 日までを期間として出されました。それを受けて大阪・兵庫・京都の関西の 3 府県も、同様に緊急事態宣言を出してほしいと政府に要請しました。また国会では感染拡大防止のために厳罰化の方向での特別措置法の改正が検討されるようです。感染の拡大を止めるためには、一人一人の意識を高めることが不可欠だということは分かります。しかし、腰の重たい政府にしびれを切らしてか、プレッシャーを与えるためか、医師会を始め各地の自治体などが「非常事態宣言」「レッドステージ」など、様々な言葉を乱発したために、却ってどれも目立たなくなってしまったような気もしています。そもそも 2011 年の福島第一原子力発電所の核事故以降、「原子力緊急事態宣言」はこの 10 年間一度も解除されないまま、今も続いています。しかし、その緊迫感はどれだけの人が共有しているのでしょうか。医療崩壊が続いている新型コロナウイルスの感染拡大の中、倒産、失業による貧困も増えて来ています。このコロナ禍の状況下で、私たちには何が出来るのか。何をしたらよいのか。外見を整え、見かけを取り繕うだけではなく、中身もしっかりしたものとして、心を込めて日々の生活を送れるようでありたいと願っています。

遅くなりましたが、先月に皆様から献げられましたクリスマス献金の集計が出ました。ここ数年、礼拝出席者の減少と共に献金も減少していましたし、特に昨年はコロナ予防のために礼拝に皆が集まることができないということもありました。クリスマス礼拝も少人数で行いました。しかし、そのような中でも、直接教会の礼拝に来られた方ではありませんでしたが、「自分はそれほどコロナ禍の影響を受けていないから、今本当に困っている方々のために使ってほしい」と言って、クリスマス献金を届けて下さった方もありました。感謝をもって、今年も 6 つの団体に献金させていただきます。

「人は見かけか、内面か」。人間の判断を飛び越えて、神様の働きは、小さくされている者の内に現れます。私たちは日々に迷ったり、つまずいたり、進むべき道を見誤ってしまったりもしますが、それでもいつも共にいて導いてくださる神様に信頼して、今日もここから押し出されて行きます。